

中国の城 *

The castles of China

田中 邦熙**

By Kunihiro TANAKA

概 要

中国では、古来都市と城郭の関係がその時代の歴史的背景を反映し不可分の関係にあったため都市全体を城壁で囲んできた。また広大な国土の各地に多くの行政上の拠点となる政治都市の「都城」が築かれ、廃棄・修復を繰り返して利用されてきた。地方においても、自衛的な城郭都市が多数存在した。

殷周から戦国時代までは、「邑（都市国家）」の分立と連合の時代であり、戦国時代には領土国家が形成され、前二世紀末に秦が中国統一、「郡県支配体制」を確立した。漢・魏晋南北朝時代には郡の上級行政単位として州が置かれ、「州郡県の三級行政区分」統治、隋唐時代には州と郡とを整理統合し、「州（郡）県二級行政区分」統治が行われ、州城・県城という「城郭都市」が成立。その頂点に皇帝のいた国都すなわち「都城」が位置した。唐宋以後には国都を含め重要な州は他より一ランク上の「府」と呼ばれた。以後遼金元時代、明清時代においても、基本的にこれらの城郭都市が踏襲された。

中国の城壁構造は、「黄土を突き固めて構築」され、後に城壁表面を「^{タタキ}碑」（黄土を練り固めて焼成した煉瓦）で被うようになり耐久性が増大し、また各種の防城施設が設けられた。城壁で囲まれた城郭内は宮城とともに庶民の居住地域もあり、外形は一般に方形で、その規模は都城の城壁周長が数十 km に達するものから、農村の数十軒程度を囲む小さなものまで様々であった。

1. まえがき

本報告は「中国の城の変遷・分類」に関して、愛宕元著：「中国の城郭都市」中公新書 1014、中央公論社発行：1991.3 をベースに、他の資料や現地踏査結果なども加えて城郭都市変遷の歴史的背景を整理考察したものである。

「邑」の字は、周囲を画した土地とひびまづいた人からなり、濠・柵・土壁などで囲まれた内に集住する人間すなわち集落を意味する。また「國」の字の口はくわ圍繞する城壁、中の或は武器の戈、人民を意味するロ、土地を意味する一とからなり、邑も國も城郭を持つ都市国家を表す文字である。また「城」とは、盛り土することを成と言ひ、版築の防壁内に人民を集住させることを意味する。従つて邑も國も都市国家の意味であり、城壁を備えることは当然のことである。

2. 新石器時代

中国の新石器農耕文化は、BC5500～5100 年の先
仰韶文化期(磁山文化層・裴李崗文化層など)の始期、
BC4000～2500 年の仰韶文化期(半坡遺址・姜寨遺

址・廟底溝遺址など）の前期および BC2500～1600 年の
 竜山文化期（王城崗遺址・平糧台遺址など）の後期に
 区分される。

仰韶文化は華北黄河流域を中心に乾燥性雑穀栽培を行っていた原始定住村落（土塼・土壁などは存在しない）とされてきたが、同時期に揚子江中下流域でも稲作栽培を行っていた青蓮崗文化層・良緒文化層・屈家嶺文化層などが発見され、中国の文明発祥は黄河文明の一元論では説明できない。

なお仰韶・竜山期の原始村落遺址は数千が確認されているが、これらは黄河の支流からやや離れた丘陵上に立地している。

半坡遺址:東を北流する澧河の河床より約9m高い黄土台地上にあり、5万 m²の重層集落址で周囲に幅・深さ5m程の濠溝を廻らせている。この頃ではまだ城 塙は確認されていないが、夯打法（黄土を一定の厚さごとに突き固めて層を造る版築技法）が集落内の住居址に認められ、住居の基部が強固に締め固められている。

王城岡遺址：竜山期後期のもので、嵩山の南、五渡河西岸の台地上にある。ほぼ 100 m 四方の同規模の東西二城からなり、基礎槽という地下に掘り込まれた城壁基部が確認された。基礎槽は厚さ 10 cm 程の夯土層からなり、版築技法で造られた。①版築城壁の存在、戦車・弓矢・戟などの青銅武器出現 ②宮殿・宗廟など

* Keywords : 城郭都市、州郡県制、邑、鎮、磚

正会員 博（工学） （社）日本公園緑地協会
（〒192-0371 八王子市南陽台 2-33-16）

の大規模建築の出現 ③青銅や玉などの祭祀用儀器・祭祀遺跡の存在 ④職能集団による手工業作坊の存在 ⑤城郭都市を中心としそれに従属する集落分布の規則性などが確認され、原始的な地域首長が一定規模の城壁を持つ拠点を構えるようになったことが同われる。

3. 殷（商）・周（西周→東周）時代

3. 1 概要

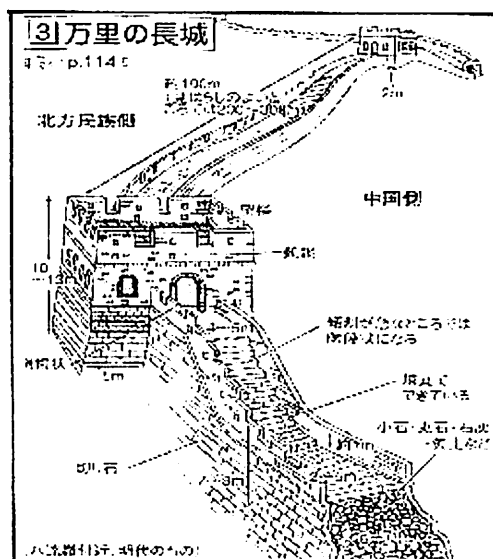
殷（商）・周時代は、都市国家の時代であり、大邑が多くの中小邑を宗教的・軍事的に従属させた邑連合の時代である。各邑は独自の神々を持ち、祖先が同じ血縁集団が支配層である都市国家で、城郭を中心に周辺に半径数十 km の耕地を持っていた。

殷代には丘陵最高部の邑首長の居住や宗廟のような神殿祭祀場を囲む城壁が強化され、城下の民居区も簡単な土壁で囲まれて一定の防御機能を果たしていた。戦時には城下の民は城内に籠って防戦し、中小の邑はこのような「山城式」が一般的であった。

周を中心とする西方の都市国家同盟軍が殷を中心とする東方の都市国家同盟に勝利した BC1050 年頃から、BC770 年に犬戎勢力などの圧力で本拠を鎡京（宗周—西安付近）から東の洛邑（成周）に移すまでを西周という。西安市の西郊外の酈鎡地区からは周代の建築遺址・墓葬・戦車坑などが発見されているが、城壁址は未発見。

東周期前半の春秋期には民居区を囲む外壁が強化され、「城主郭従式」から「城従郭主式」の「内城外郭式」へ移行、内壁が城、外壁が郭である二重構造となった。

東周期の後半戦国時代になると、従来の邑と呼ばれた都市国家から「領土国家」が形成された。戦国中期には戦国七雄が互いに争い、BC221 年に秦が全国統一領土国家を成し遂げる。この背景には、宗教的權威の低下・戦争様相の変化などがある。すなわち、殷の神権政治や西周の宗法に基づく周王の絶対的權威が低下し、春秋五霸のような有力諸侯が実力を持つようになる。春秋中期になると諸侯の邑内においても下克上の風潮が強くなり、新しい戦国的君臣関係が形成され、宗教的權威の低下が祭祀施設を囲む内城の重要性を低下させ、城郭構造の変化が生じた。一方戦争形態も都市国家同盟相互の戦車戦による野戦から領土国家間の歩兵を主力とする大規模な攻城戦へと変化し、戦争が長期化し、外郭の強化につながった。内城は事実上無きに等しくなり、外郭の強化が図られ、内の城と外の郭の区別が無くなり、「城郭一重構造」となった。なお春秋時代各国は国境線に長大な長城を築いたが、秦が



図－1 万里の長城（明代—八達嶺） 文献 2)

全国統一すると内地長城は撤去され、秦・趙・燕の北辺長城は接続延伸され、秦の万里の長城となった。当時の長城は版築法による土構造であったが、その後明代の八達嶺付近の万里の長城の構造（図－1）のように発展した。

3. 2 殷代の城郭都市

偃師殷城：河南省偃師県の洛河北岸台地上に殷代前期（BC1600 年頃）に出現。城壁全周 5,340 m、城壁基部に夯打法で突き固めた底幅 17.7 m、深さ 0.6～0.9 m の「基礎槽」が確認。

鄭州殷城：河南省鄭州市街地にあり、平地より 5～10 m 高い岡上に立地。城壁周長 6,960 m、城壁厚さ平均 15.8 m、残高平均 4.3 m、殷代中期（BC1350～1250 年）築城とされる。主城壁の両側面に「護城坡」が存在し、主城壁の側面強化が図られた。城壁上部あるいは外被には、戦国期の夯土層と宋代の夯土層が認められる。また城址東北部には複数の大型版築基壇が発見され、表面は堅い石灰土や細かい粘土で整形固化されていた。城址外からも骨器製造所・鋳銅所・酒釀造所・製陶所などの遺址も確認。

盤竜城：湖北省武漢市黄陂県にあり、夏秋だけに冠水する長江の遊水池盤竜湖の半島状の丘陵上に位置。東西 260 m、南北 290 m の方形。鄭州殷城址と類似性が強く、同時期築城と考えられる。各地に多数分立していた中規模の都市国家の平均的タイプであり、大都市国家殷に従属した地方の山城式都市国家の一つ。

殷墟：河南省安陽の殷墟は、殷代後期の第 19 代盤庚から第 30 代紂の滅亡時まで 273 年間の殷の本拠地。

一般には殷の都は**商（殷墟）**とされる。東南流する洹水（^{へん}）を挟んで兩岸沿いの 24 km²に、宮殿址・作坊址・集落址・大墓群と中小墓群・祭祀坑・戦車坑などが分布するが、城壁址は未発見。そのため殷墟は祭祀を行う享堂か宗廟遺址の可能性が高いとされる。百以上の田獵地が殷墟中心から 20 km の範囲に点在。

3. 3 春秋・戦国期の城郭址

魯国城：魯国は西周初に周公旦が曲阜に封じられて以後、戦国後期 BC256 年に楚に滅ぼされるまで存続。曲阜の阜とは、黄土台地を意味する。**魯都曲阜古城**の規模は、周長 11,770 m に達し、横長のほぼ長方形である。城址中央部に宮殿址の夯土台基があり、上層に漢代の魯国層、下層に東周期層が見られる。城壁痕跡は未発見。

臨淄城：齊国は殷周革命時に活躍した周武王の軍師太公望呂尚（^{りやうしやう}）が封じられた諸侯の代表格である。臨淄城は春秋期までの姜齊、戦国期の田齊を通じて国都であった。周長 14.2 km の大城と 7.3 km の小城からなる複郭構造である。

鄭韓古城：鄭は西周末に桓公が鄭（陝西省）に封じられた諸侯の一国で、次の武公は周平王の東遷（BC770）に従って**新鄭**（河南省）に移り、春秋期の鄭国の本拠であった。戦国初期（BC375）に晋を三分して自立した韓が鄭を滅ぼしこの地に本拠を移し、BC230 年秦に滅ぼされるまでの 146 年間韓の国都であった。

鄭韓古城は、周長 15 km の東城と 10 km の西城が接し、黄水と双洎河（洎水）に東西南を囲まれ、両河の合流点のやや高所に立地する。地表の残存は良好で、残高 15～18 m、基厚は 40～60 m と巨大な版築城壁が存続。下層は層厚 10 cm の夯土の春秋期の**鄭城址**、上層は層厚 10～19 cm の夯土の戦国期に増築された**韓城址**である。

邯鄲古城：BC386 年晋陽からこの地に遷都し、BC222 年秦に滅ぼされるまでの戦国七雄の一、趙の国都。漢代にも臨淄と並ぶ大都市として繁栄した。

現在の河北省邯鄲市の南約 4 km に、東城（東西 940 m × 南北 1,430 m）、巨大な宮殿建築の基壇を持つ西城（1,390 m × 1,420 m）、北城（1,330 m × 290 m）の三城が品字型に接した**趙王城**と呼ばれる城郭址があるが、さらに現在の邯鄲市を囲むように**北大城**（東西 3,000 m × 南北 4,800 m）も確認された。趙王城は春秋期以前に築城された宮殿区、北大城は春秋末から戦国初に築城された一般民居住区と作坊区であったと考えられる。

大梁城：魏は当初**安邑**（山西省夏県）—中国国内最

大の塩の産地、夏禹の夏墟—に国都を置いていたが、戦国中期 BC364 年大梁（河南省開封市）に遷都し、BC225 年に秦軍による水攻めで滅ぶまで魏の国都であった。千年以上後に北宋の都城**開封府城**となるが、すぐ北を東流する黄河の氾濫で北宋開封府城でさえ十数 m 堆積した黄土層の下に埋もれている。

燕下都武陽城：燕の上都**薊城**は、現在の北京市と重複する地と比定されているが、戦国期の城址は確認されていない。下都武陽城址は北京市の西南約 100 km の河北省易県にあり、宮殿区を含む内城である東城と外城に相当する西城とが接する。

郢都紀南城：郢都紀南城は、春秋中期 BC689 年から戦国後期 BC278 年秦の白起に攻略されるまでの約 400 年間の楚の国都である。外周 16 km 程の長方形で、外郭は春秋期末ないし戦国期初築造と考えられる。

その他の城址：戦国期の国都のような大城郭は、中央集権政策により生じたもので、首都または重要な軍事都市に限られ、大多数の地方都市は微力な農業都市にとどまっていた。

春秋・戦国期の中小の城郭：山東・河北・河南・陝西省などで 40 前後確認されている。邾城（周長 9,200 m）・郛城（10,600 m）等の他、畢万城・清源城・洪洞古城・東不羹城・鄆陵城・滑城・陰晋城・講武城などは全周 4.5 km 以下の中規模の城で方形または長方形である。中小の多くの城は、秦漢以後に県城に再編または破壊消滅したと考えられる。

4. 秦漢時代

4. 1 統一以前の秦

秦は古くから甘肅省天水市付近を本拠とした有力勢力であったが、BC770 年周の東遷に功績があり、諸侯に列せられ、岐山（陝西省）以西の西戎の地を与えられた。初代襄公は汧（陝西省）に拠点を移し、二代文公は「**汧渭の会**」に、三代寧公は平陽に、春秋中期の六代徳公は**雍城**に、戦国期の二十代霊公は涇陽へ、二十四代献公は櫟陽へと順次拠点を東へ移した。二十五代孝公の時、BC361 年と BC350 年の二度にわたり「商鞅の変法（国政改革）」を実施し、秦が大きく成長、この変法の一環として、咸陽へ遷都した。

4. 2 秦時代の城郭都市

雍城：陝西省鳳翔県南に位置し、BC677 年～BC383 年の 295 年間の秦の国都。東西 3,300 m、南北 3,200 m、周長 13 km の長方形に近い平面プランを持つが、春秋末から戦国期に拡張された。城内の大街は東西四条、

南北四条が平行に走り、長さは約 3,000 m で各城門に通じ、幅は 15~20 m、踏み固められた路面厚さは 1.1~1.5 m。雍城南郊外に歴代秦公の陵園（東西 3 km、南北 7 km）があり、四基以上の大墓と多数の陪葬坑や車馬坑が確認されている。秦公一号墓は地下 24 m の巨大なもので、第十三代景公の陵墓と推定されている。

櫟陽城：櫟陽は咸陽より約 50 km 東方に位置し、対魏最前線の戦略拠点とも考えられる。国都は BC383 年に雍城から櫟陽に移されたが、33 年後には咸陽に移された。東西 1,800 m、南北 2,230 m、周長 8 km 程の長方形で、計画的な築城と都市計画が伺われる。

咸陽城：秦の孝公（BC361~380）は衛国の公子商鞅を重用し、「商鞅の変法」と言われる国政改革を実施。周以来の「封建制」を廃止し、皇帝の代理の官吏を派遣して地方統治するシステムである「郡県制」を実施した。始皇帝は六国併合の過程で全国を 36 郡（後に 48 郡）に分け、長官として守、次官として丞、郡内の軍隊指揮官として尉、監察官として御史などを各郡に派遣して地方統治した。郡の下級行政単位の地方拠点が県であるが、県が増加するにつれて複数の県を統括する郡が置かれた。秦漢以降も、これらの都市国家の城郭が郡城・県城の地方行政都市として存続した。

また私的恩義関係に対する処罰規定、度量衡統一などとともに、咸陽（現在の西安の北西約 20 km）へ遷都。秦王政（始皇帝）は、六国各国を併合するたびにそれらの国都の主要宮殿を解体して咸陽に移築した。しかし城壁址は発見されていない。

BC221 年の全国統一から 12 年後、始皇帝は 50 歳で沙丘（河北省）にて崩御。BC209 年の「陳勝・呉広の反乱」を機に全国で反乱の火が上がり、当時項羽の支配下にあった劉邦は二世皇帝胡亥を継いだ公子嬰を降伏させ、秦は滅びた。項羽軍は咸陽を徹底的に略奪し、火を放ち、咸陽は灰燼に帰した。その後「楚漢の争い」の項羽と劉邦の二大勢力となる。

驪山陵は、咸陽の東 40 km に始皇帝が即位とともに造営開始した寿陵だが、項羽軍 30 万人が 30 日で徹底的に盗掘した。陵の東 1,200 m の兵馬俑坑は盗掘をまぬがれ完全な姿で我々の目の前に現れた。兵馬俑の将兵たちはすべて東を向いていて、東方旧六国を潜在的脅威と認識していたことを示している。

4. 3 漢時代の城郭都市

漢の長安城：劉邦は「楚漢の戦い」で項羽を倒して漢王朝を創始、高祖となり、秦都咸陽の真南、渭水南岸の長安に新たに都城を築く。漢都長安の城壁址は大

部分が現存していて、平面プランを明確に理解できる。高祖の時に正殿である未央宮、その東の秦の宮殿址に長樂宮が造られ、城壁は二代恵帝が 5 年かけて完成、周長は 22.7 km に達する。

陵邑：漢代の首都圏三輔（京兆伊・左馮翊・右扶風）管下には、各皇帝が生前から造営開始した帝陵に隣接して陵邑という新たな城郭都市が建設された。漢代のみ存在した特殊な県である。高祖の長陵に付設された長陵邑は、北壁 1,300 m、西壁 2,040 m、南壁 1,190 m。恵帝安陵は長陵の西 4 km にあり、北壁 1,640 m、東壁は 710 m。

一般の郡城・県城と郷・亭・里：漢代の郡県数は、103 郡国、1314 県、32 道、241 侯国であった。道は辺境の非漢族居住区の県と同レベルの行政単位で、現在の少数民族自治県や自治旗に相当する。侯国は県レベルの封建地で、武帝期以降は県と同義である。従って県・道・侯国の合計 1,587 が実際の県数で、郡・県の中心は城郭都市の郡城・県城に相当する。高祖劉邦は秦以前の封建制と郡県制とを折衷した「郡国制」により地方統治した。

漢代の農村社会は、郷・亭・里と呼ばれる聚落の複合から成っていた。前漢期の郷数は 6,622、亭数は 29,635 で、版築土墻で囲まれた百戸程度の農民聚落である里を一つのまとまりとし、幾つかの里が集まった聚落が郷・亭である。県城はこれら聚落の大きいものであり、城内は里にブロック化されていた。県城の主な城内住民は農民であった。

漢代の県城クラスの城址は、今日 200 程度確認されている。規模はほぼ周長 2,000~4,000 m で、これらは修復されながら後世の県城としても利用された。

5. 魏晉南北朝時代

3 世紀初めに 400 年続いた漢が滅び、6 世紀末に隋により統一されるまでの分裂時代は、魏・呉・蜀漢の三国期、晋の統一、五胡十六国、晋の南渡、南北朝期と数多くの政権が興亡し、国都も各地に置かれた。

5. 1 魏晉南北朝時代の城郭都市

洛陽城：後漢光武帝が洛陽に都を定めて以来、魏・晋・北魏が都をおいた。洛陽は西周初に東方経営の拠点として洛邑（成邑）が築かれ、東周が洛邑を都とし、秦に滅ぼされるまで都城であった。漢代には洛邑内城が河南県城として利用された。

後漢の都城洛陽は、主用建造物の整備が終わり、東西六里、南北九里の大きさから九六城と呼ばれた。

後漢末長安に遷都した時、洛陽は略奪放火された。

魏の文帝曹丕は、鄴から洛陽に進駐し再建整備して再び都とした。魏の洛陽城は漢のものを踏襲したが、西北に**金墉城**を増築。城の全周は14,350 mあり、城壁側面七か所には魏晋期増築の城壁を外側に突出させ防城効果を高める最古の**城壕**（または**馬面**）がある。

西晋末316年、「永嘉の乱」で洛陽は匈奴に攻略され、西晋は滅亡。

五胡の一鮮卑族拓跋部の北魏は、部族制の解体・漢人知識人の登用などで中国一元化策を推し進め、439年三代太武帝の時河北統一。六代孝文帝は、均田制の実施・胡語胡服禁止などを行うとともに、**平城**（山西省大同）から洛陽へ遷都し再建した。七代宣武帝は洛陽城の大拡張を行い、外郭城内は一里四方にブロック化され坊と呼んだが、碁盤目状の都城の姿は隋唐時代の都城へ引き継がれた。

北魏洛陽城の城内は、中国最初の仏寺白馬寺の西に大市、洛水に架かる永橋のたもとの四通市又は永橋市などがあり繁栄、城内には最盛期で1,367寺があった。

後漢以後の洛陽城は北魏末の動乱で大きく破壊され以後再び都城とされなかった。隋唐の東都洛陽城は、西約15 kmに新たに造営された。

鄴城：「黄巾の乱」の平定に活躍した曹操は、「官渡の戦」で袁紹を破って華北の覇権を手に入れ、拠点であった許昌から袁紹の拠点鄴へ進駐、鄴城の大幅な整備を行った。220年曹操の子曹丕（文帝）が後漢の献帝に帝位を譲らせて魏を建国し都を洛陽に遷都するまで、鄴城は魏の都城であった。その後五胡期の後趙石勒、後燕慕容皝も鄴を都城とした。北魏が東西に分裂した後の東魏・北齊も都城とした。

曹操期の鄴城：東西七里・南北五里、城内は東西の大街で南北に二分、北部中央に宮殿区、西壁北端には防禦のため冰井・銅雀・金虎の三台が築かれた。

東魏・北齊の鄴城：曹魏城に南接して周二十五里の南城が築かれた。

建康城：三国呉の孫権は長江南岸の秣陵を国都に定め、**建業**と名付けた。以後東晋・宋・南齊・梁・陳などの南朝諸政権（6朝時代）はいずれもこの地を国都とした。東晋時代に、業を康に改め、**建康**と改称。その後10世紀の五代十国期には南唐の国都**金陵城**として修築、14世紀明初に再び国都とされ大拡充、15世紀初め明の永楽帝が北京へ遷都し、副都南京と呼ばれた。

六朝期の建康城：周囲に長江支流の中小河川が複雑に流れていて、築城の制限のもと護城川として利用。城壁の防護機能に問題があり、石頭城・西州城・東府城などの城砦が外城の外に築かれた。

晋陵郡城：現在の南京市から50 kmほど長江を下った鎮江市は、揚州に通じる交通の要衝であり、三国呉の孫権が周870 mの強固な城砦を築き、**鉄瓮城**と名付けた。東晋期には京口と呼ばれ、晋陵郡治が置かれ、城郭が増強された。東晋政権は都城建康に至近の京口に北府軍団を置き、対北防衛の拠点とした。

晋陵郡城は、長江南岸の標高30 mの丘陵上に城壁址があり、周長4,700 m。版築土城を磚で被った強固なもの。晋陵郡城の西壁は唐代潤州城の東壁の一部として再利用された。西壁部は孫呉の**鉄翁城址**がそのまま取り込まれている。

統万城：五胡期に夏を建国した匈奴族赫連勃勃が築城した統万城は保存状態が良好。内蒙古自治区に接する陝西省最北端に位置し、413年に夏国の都城として創築されたが、15年で北魏に攻陥された。北魏は最初軍鎮としたが、487年に孝文帝は民政移管して夏州の治所とし、その後西魏・北周・隋・唐の**夏州城**として受け継がれた。10世紀の宋代に唐代後半以来この地に移住してきた党項（タングート）族平夏部が西夏を建国。1227年モンゴルに滅ぼされて以来統万城（＝夏州城）は砂に埋もれていた。

無定河北岸のEL1,150 m前後の西北に高い緩傾斜面にあり、外郭部と東西二つの内城からなる。外郭城は地表に痕跡をとどめていない。東西両城を合わせた外周は3,660 m。統万城には、城門の外にさらにもう一重の城壁**甕城**（月城）、城郭四隅に高い長方形の**墩台**と呼ばれる監視哨、城壁外面にほぼ50 mの一定間隔で最も古い時代に造られた**馬面**と言われる張り出し、石灰に水を加えて膨張させこれを黄土と粘土に混ぜて突き固めた格段の強度を持つ版築技法の採用などがあり、防御機能が優れていた。

なお漢代の対匈奴最前線の辺境の上郡**奢延県城**はこの統万城の正城基と考えられる。今日城壁には窑洞が穿たれ、居住として利用されている。

村と塢：漢代までの周囲を土塙で囲まれた里（およびその集合体である郷・亭）と呼ばれた農村聚落は、魏晋南北朝期に次第に姿を消し、各所に農家が点在する「散村」が出現、中国社会が古代から中世へ転換する指標の一つである。この背景として、次のような点があげられる。①血縁的集団の大土地所有層の豪族が兼併や開発により土地所有を拡大し、土地を失った小農は流亡して佃作・傭作（小作）へ吸収され、広大な荘園内の各所に少数ずつ居住を与えられこれが散村につながった。②後漢以後の政府は匈奴・羯・姜・氏族などの遊牧系諸族を個別分断して中国内地の陝西・山

西・甘肅等の荒蕪地に強制移住させ、「内徙策(徙民策)」を進めたが、彼らは劣悪な生活環境下で聚落を作り散村へつながった。③後漢末の群雄割拠の中、うち続く戦乱で各地に広大な逃棄地が発生し膨大な流民が生じた。曹操の屯田策の「民屯」では、逃棄地を国有化し、流民を吸収し傭作に従事させ、国家による荘園経営を行い、民屯地内に傭作農民の居住区が作られ散村が形成され、郷と呼ばれるようになった。

一方三国期・五胡十六国期・南北朝期の混乱期に、強固な土壁や土塁を持つ「塢」と呼ばれる自衛聚落としての城塞的聚落が発生した。天然の要害に立地し、小さいものでも500～1,000戸以上も収容し、近隣の塢と共同戦線を張る運命共同体であった。堡・壁・塁なども同じ部類に属する。

6. 隋唐時代

6. 1 隋唐時代の城郭都市

長安城：581年に隋を建国した文帝楊堅は、漢長安城が渭水河浜に近く低湿であるのを避けて、582年その東南10kmに新都城大興城の造営に着手、宮城・皇城が整備され、二代煬帝の613年に完成。

唐建国の618年には大興城から長安城へと改称。三代高宗の652～654年に羅城(外郭城)と九門が完成。663年には北郭外西内苑東に大明宮が完成。玄宗期(712～756)には城内東端の北から第四坊の興慶坊を中心に興慶宮が造営され、本来の宮城を西内・大明宮を東内・興慶宮を南内と呼んだ。この三宮と東南端の芙蓉園を結んだ東壁は、上層両側に障壁を持つ皇帝潜幸のための専用道路の夾城とされた。

羅城は東西に長い長方形で周長は36,550mに達した。

羅城北辺中央の宮城と皇城は現在の西安市街、明清期の西安府城の直下に相当し、調査は事実上不可能。

長安城内には多数の寺院や道観があったが、現存する唐代寺院建築は、大慈恩寺大雁塔・大薦福寺小雁塔だけである。

洛陽城：隋の煬帝は、荒廃した漢魏洛陽城の西約10kmの洛水に、605年陪都として洛陽城の造営に着手。隋の統一は北朝による南朝の併合であり、長安(大興)城の代替地として、江南の諸物資を長江・淮水・黄河を南北に結んだ大運河を用いて運ぶ要害の地洛陽を陪都として選んだ。

隋唐の洛陽城は、洛水を挟んで北城と南城とから成り、天津・中・浮橋の三橋で連絡されていた。南北両城を合わせた城壁外周は28kmに達し、長安城より一回り小さいが、州城クラスでは蕪州城に次ぐ大規模な

もの。特に注目されるのは含嘉倉城で、最大径18m、最大深さ12mの窖(穴蔵)が400以上確認され、400万石(24万kl、47万人の年間穀物消費量)の穀物を蓄えていた。

州郡県制から州県制へ：地方行政の単位は、秦漢以来郡と県であった。前漢武帝時代に広域監察権を与えられた「州刺史」が置かれたが、郡県の行政には関与しなかった。後漢期になり行政権も持つようになり、「州―郡―県の三級行政区」が成立し、魏晉南北朝期を通じて踏襲された。

晋の南渡以後、江南の開発が進んで人口が増加したこと、華北の混乱時に膨大な流民集団が南に移動し、南朝諸政権は華北での本貫地を付けた僑郡を新設したことなどにより、州・郡の細分化が進みその数は大きく増えた。そのため僑郡・僑県の増加に対する官吏は激増し、隋の文帝は郡を廃して州に一本化し、全国の「州県二級行政体制」を完成した。同時に地方長官の裁量で自由に地元の人間を採用できた「辟召権限」を廃し、地方官人事権をすべて中央に回収、軍事権も奪って中央集権を強化した結果、300州・1500県体制となり、唐代以降清代まで維持された。したがって隋代以降近代に至るまでの城郭都市は、州城・県城を指す。

太原府城：太原府城は複数の城郭が外接せず、南流する汾水を挟んで東西二城が相対峙している。主郭は西城で、周42里(80km)という大規模なものである。西城の西北隅には、大明城・新城・倉城の三内城があり、これらは東魏・北齊期の宮城として築かれた。太原府は唐高祖率兵の地であり、唐代には北都として都城に準じるランクが与えられ、西都長安・東都洛陽の宮城・皇城に相当する城内区画がなされた。後半期には河東節度使の使府(幕府)が置かれ、西城内の三内城郭が子城(牙城)として機能、次いで五代期の北漢政権が再び宮城とした。

河陽三城と蒲州河中府城：東都洛陽の東北の河陽三城は黄河の南北兩岸の北城・南城二城と中洲上の中渾城を指し、浮橋で結ばれていた。

蒲州河中府城は西都長安と北都太原府を結ぶ幹線ルート上にあり、南流する黄河の大きな中洲を挟んで東西二本の浮橋で結ばれていた。黄河東岸に河東県城、西岸に河西県城、中洲上に中渾城が置かれ、この三城を蒲州河中府城と言った。

唐時代の黄河架橋地点は上述の河陽県城の河陽橋・蒲津橋および陝州の太陽橋の三橋のみであった。

6. 2 築城・防城

古代から唐玄宗までの歴代諸制度をまとめた杜佑の「通典」の軍事制度・戦略・戦術・戦訓を記した「兵典」の一節に「守拒の法」がある。版築は一人一日に二立法尺、濠の掘削は三立法尺を基準とし、城壁構築や城濠の改修などの工期・人員などを算出している。

また城郭防御の方法として、城郭の外 15.5 m ほどの濠の内側に築く「羊馬城」といわれる土塙があり、唐末五代期のものが、大原府城・河陽三城・成都府城・濠州城・庭州城などで確認されている。

その他郷城・月城・重門・連拒馬槍などのバリエーション・閘門・弓台・転閉橋・地聴などが示されているが、戦国時代以来の知識や技術の蓄積の延長線上のもので、後世にはより具体的に挿絵入りの書物も登場した。

羅城・外郭城・外城・大城などに区分された城構造の実態は変わらず、内側に子城・牙城・内城・中城などを持つ重郭構造である。唐代後半以降に外郭城が旧城を囲む形で新築され、旧城が子城となった例が多い。

6. 3 唐末五代期の城郭

州城クラスの城の周長は、長安・洛陽と言った都城や太原府・揚州・蘇州など以外は二十里前後で、県城クラスでは十里を超えるものは少ない。周長二十里以上の州城・十里以上の県城は、唐末から五代十国期に増修拡張されたもので、多くは江南に集中。

6. 4 高句麗・渤海の城

朝鮮半島北部を根拠とする高句麗は、313 年建国以後隋の煬帝の 3 度の遠征にも耐えて、668 年新羅に滅ぼされるまで栄えたが、五女山城・国内城など朝鮮半島の山城の原型となる多くの山城を遺している。¹²⁾

その後高句麗の遺民と靺鞨人による渤海が、中国東北地方から朝鮮半島北部に於いて、唐の制度を取り入れつつ 8 世紀から 9 世紀に栄え、城郭都市を遺した。

7. 宋代

7. 1 概要

唐滅亡後の半世紀に及ぶ分裂期、五代十国期を経て、宋が再び統一を完成。「唐宋の変革」と言われ、この時代には中国社会全体の流動化・多様化という大きな歴史的変革が生じ、商業経済の隆盛・城郭都市の都市化などが顕著であった。

宋は軍閥割拠の乱世を治め全国統一すると、武人支配から文官支配への転換を基本政策とし、軍閥拠点の大規模城郭を撤去縮小させた。

7. 2 宋代の城郭都市

北宋の国都開封府城：汴州開封府は、戦国魏により開拓され、その中心邑として築城された。

戦国中期 BC4 世紀半ば、秦の圧力を受け、魏は安邑から開封に国都を移し、大梁城と称した。

秦漢以後は、郡治・州治が置かれこの地方の中心城郭都市として栄え、唐代には汴州と呼ばれた。

唐代半ば、「安史の乱」時の 756 年、反乱対策として最初の内地節度使の河南節度使が設けられ、大運河と黄河の合流する要衝である汴州は使府州とされ、その後宣武軍節度使と改称。

唐末の「黄巾の乱」で、反乱軍側の武將朱温が唐側に寝返り、唐朝は長安奪還。僖宗皇帝は朱温に朱全忠の名を授ける。907 年朱全忠は唐を滅ぼし、後梁政権を樹立、国都は汴州で開封と改称。

その後の五代政権は、後唐の時の洛陽以外、後晋・後漢・後周も開封を国都とした。

開封府城は、唐代までの「坊市制」が崩れ、街路にまで居住区が拡大、開放的な都市へと変貌した。構造的には三重城郭構造で、一番内の大内は宮殿で周 2,750 m、唐代汴州城の子城・宣武軍節度使の幕府が置かれた牙城、内城は周 11 km、唐代汴州城の羅城（外郭城）、一番外の外城は周 27 km で、五代四政権の国都とされ市街化が羅城外へ急速に進み、これらを囲む形で五代末後周の 955 年に築かれた。

城内には七か所の瓦子（勾欄・酒楼などの娯楽施設が集中）があり、宋代の消費都市を表している。

開封のすぐ北を東流する黄河は、膨大な量の泥土を堆積し、宋都開封府城も 5～12 m 下に埋もれている。

南宋の行在臨安府城：1126 年「靖康の変」で開封府城は、東北部に興った女真族の金軍により陥落、北宋は滅び、華北全域は金の領土となる。

江南に逃れた宋室は杭州で政権再建。1176 年蒙古軍により滅ぼされるまでの約 150 年間の南宋の行在が杭州臨安府で、皇帝の行幸地として行在と呼ばれた。

杭州には秦漢期から錢唐県が置かれていたが、隋が南北統一・大運河を完成させると、この地の重要度は高まり、県から州に昇格させて杭州とし、周三十六里の城郭を築いた。

唐代の杭州城は隋代のまま継承した。

唐末五代期に錢氏呉越が 890～897 年に大拡張し、国都とした。夾城（周 50 里）・羅城（周 70 里だが西湖により制約され南北に細長いので腰鼓城と言われた）により、大幅な増修がなされた。

北宋期には南北夾城部廃止、東壁も後退し、縮小。

華中・河南の十国が宋により統一される過程で、大規模な城郭の多くが破壊縮小された。

元末に東壁が再び東へ拡張され、二十世紀まで踏襲された。今日でも街並みは昔の面影をよく留めているが、城壁は存在しない。

7. 3 城市構造の変化

唐代までの城郭都市では治安と管理が第一であり、「坊市制」による場所の制限と「夜禁制」による時間の制限が原則であった。

宋代には市街地化の著しい城門外だけが新たに囲まれた関城（甕城をより大規模にして城門全体を囲み防禦強化を図った）は、唐末五代の戦乱期に各地の城郭で見られる。宋の統一により大規模な城郭の多くが破壊縮小され、関城も多くは撤去。都市管理も従来の坊市制から廂（軍隊の編成単位から警備巡察区画・都市の行政区画へ変化）・隅（防火兵士の詰所から防火区画・行政区画へ変化）へ、新しい城内区画へ変わった。

城郭の規模は、唐代の州城クラスで城周二十里(78 km)、県城クラスで十里(39 km)以下のものが過半数であったが、宋代の府州県城の規模も同程度で、唐宋を通じて城郭規模に差はない。次の明清期でも、城の規模に大きな差はない。

7. 4 鎮市の出現

宋代以前にも州・県城郭外の街道などには「草市」と呼ばれる小規模の定期市が存在した。生産力増大に伴う余剰物資の商品化・地場産業の勃興などにより物流が活発になり、草市は大型化、恒常的市場が出現。

節度使軍閥勢力は殖産興業を勧め、軍隊を駐屯させ、商税を徴収。このような新興小都市は鎮、より小規模の草市・村市は市集と呼ばれた。政府公認の鎮は1,300に達し、より大きな数の多い市集は官集といわれた。

鎮の中には人口五千から数万のものも現れ、城壁を廻らすものも出現。代表として景德鎮がある。

一元的行政系列の州―県―郷―里（村）とは別に、州―県―鎮―市集―村という財政・流通系列が発生。農民レベルの自給経済を補完する水平的交換経済から、垂直方向への商品物流を媒介する鎮や市集へ変化。

7. 5 平江府図と静江府図

蘇州平江府図：南宋の理宗紹帝二年(1229)に刻された縦 197 cm、横 137 cm の石碑。現在は蘇州碑石博物館にある（写真-1）。蘇州は宋代には運河交通の拠点として繁榮平江府と呼ばれ、当時の蘇州の城郭・城門



写真-1 蘇州平江府図石碑（2010.3 田中撮影）



写真-2 桂州静江府城池図の写真(2010.3 田中撮影)

・城濠・城内の街路や水路、官署・仏寺・道観・橋梁などが名称を付して示されている。現在では城壁のごく一部を残すのみだが、蘇州城の全体像とともに城内の様子も具体的に示す貴重な資料である。

桂州静江府城池図：桂林王城内にある独秀峰南崖に刻された摩崖の石刻で、縦 2.9 m、横 2.9 m。（現在は非公開で城内にある博物館に写真が展示、写真-2）。

秦の始皇帝により開削された霊渠運河の要衝に立地する桂州は、府に昇格し静江府と呼ばれた。モンゴル軍は 1234 年金を滅ぼして華北を制圧、1252 年には雲南の大理国、ベトナムの安南国をも併合し、南宋包囲網を完成、南宋はモンゴルの攻撃に対抗するために桂州静江府では 1258 年から 1272 年の 14 年間に 4 回の城郭増修工事を行い、竣工を記念してこの石刻が造られた。版築土城の表面は磚で被われ、城壁基部は石積みで、馬面・敵楼・团楼・羊馬城と女墙・欄馬墙・垛口などの工夫があること、南門は甕城構造で羊馬城・月城のある三重の防禦策が施されたことなどが分かる。

7. 6 「武經總要」に示された城郭構造

北宋の仁宗康定年間(1040～41)に曾公亮が編纂した「武經總要」40 卷は、軍備に関する総合的マニュアル書であるが、その要点は戦国期の「墨子」、唐代の「通

典」などにすでに示されている。

図-2 に、「武経総要」に示された城制図（城郭の正面である城門を中心にした形状）を示す。城壁面は全て磚で被われ、城壁上には一定間隔ごとに凸型で垛口を穿った女牆が設けられている。左右の出張り部が馬面、その上の四角なものが敵楼、城門上の建造物が門楼である。

火薬は中国で早くに発明されたが、北方遊牧民族の弓矢を主要武器とした騎馬戦術に対抗していたため、火器の進歩は遅かった。そのため城郭構造も、宋元代でも明清代でも唐代と大差ない。

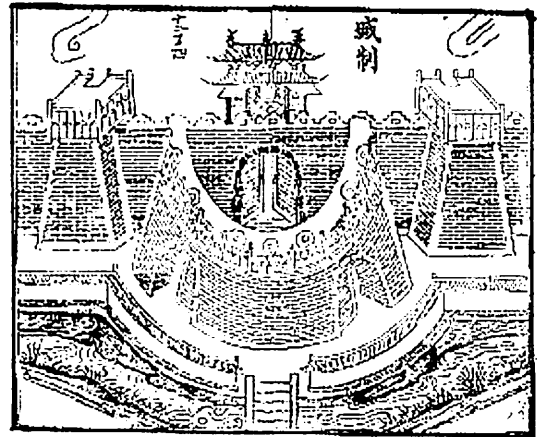


図-2 「武経総要」城制図 文献1)

8. 遼・金・元時代

8. 1 概要

遼・金・元・清朝といった征服王朝は民族性保持に努めたが、中国化の流れは抑え切れなかった。征服王朝の城郭は前代までと基本的に変わず、州城・県城等を行政拠点として踏襲した。

8. 2 遼代の都城制

モンゴル系契丹族の遼は、五代の三番目の王朝後晋の建国に騎馬軍団を派遣し、その代償として長城以南の燕雲十六州を割譲させた。遊牧と農耕の異なる領域を管理するために、上都臨潢府・東京遼陽府・南京幽都府・中京大定府・西京大同府を設けた。

上都臨潢府：遼河の上流に新たに築いた南北二城が接した複郭構造の中国風の土城で、北城に宮城が置かれ契丹人が住んだ。南城は漢城で、中国内地から強制移住させられた漢人農民や各種技術者の居住区。

東京遼陽城：現在の遼寧省遼陽で、旧渤海国の上京竜泉府の民を移住させた。内城外城の重複構造で、外城は漢城と呼ばれた。

南京幽都府（後に析津府と改称）：は唐代の幽州城、燕雲十六州の燕州城である。副都ではあるが、農耕地帯の重要拠点であり、五都中最大規模。金代に増修され、元代には大都として大拡張された。現在の北京のルーツである。

中京大定府：現在の遼寧省赤峰市の南 80 km の地。

西京大同府：燕雲十六州中の雲州で、現在の山西省大同市。農耕地帯の拠点であり、西隣するタングート族の西夏に対峙する拠点。

8. 3 金代の都城制

ツングース系女真族の金は、遼を滅ぼした後宋の淮河以北も併せ、華北の全域を支配。遼の五京を継承し

さらに故郷の上京会寧府を置き、旧北宋の都城開封府を南京とした。上都会寧府はハルビン市の東南 30 km に位置し、周長 7,080 m の宮城が置かれた南城と、周長 6,970 m の漢城の北城とから成る。

遼の上京臨潢府は、北京と改称されるが、次いで廃される。その後遼の中京大定府は北京、南京析津府は中都大興府と改称。

中都大興府：事実上の中心都城であり、新たに築城された城郭。周長 16.6 km、各面に三門計十二門があり、内城が皇城である。東北の沼沢が整備されて人工湖となり、瓊華島に離宮が造営され、現在の北京の北海・中南海の起源。

金は華北を領有して多数の漢人を支配下に置きながら、急速に中国化、1215 年中都城はモンゴル軍に攻陥され、大きく破壊される。

8. 4 元代の都城制

元の都城は上都開平府と大都の両都制である。

上都開平府：内蒙古のドロンノール（多倫）に 1256 年クビライの命を受けた劉秉忠により築城。内城と外城とからなるが、後に外城の西と北とを城壁で囲み外苑とした。内城は周長 2,380 m、外城は周長 5,100 m の方形で、外苑を含む全体の周長は 8.3 km。

大都：金の中都大興府城を攻陥後修復して使用していたが、1257 年から 1283 年にかけて中都城の北に新築。内城は周 78 km、外城は周 234 km の重郭構造。

元の皇帝（カン）は、夏には上都冬には大都に居住。

北京における金・中都、遼・南京、元・大都、明清・北京の各王朝の城壁の位置は、図-3 に示すように変遷している。

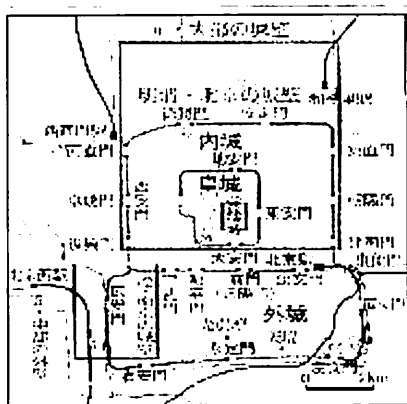


図-3 北京の城壁の時代変遷 文献2)

9. 明清時代

9. 1 概要

明清期の府州県城の様子は、当時に編纂された地方誌が多数現存すること、当時の遺構がかなり現存すること、人工衛星で撮影された「ONC マップ」に walled と記載されていること、現在の都市地図で環状路と示されている個所から城郭輪郭をたどることができることなどから、よく理解できる。現在の西安・江陵・平遥などには、明代築城時の面影がよく保存されている。

9. 2 明清時代の城郭都市

西安城: 唐の滅亡とともに、その都城長安城は壊滅、五代以降は皇城部を修築して小城郭(唐城の 1/16)として存続。

明代には、西城の戦略的重要性から北と東へ 1 / 3 程の面積が拡張され、城壁構造も強化され、そのままの規模で現在まで存続。

清末光緒十九(1893)年の「陝西省城図」には、明初の築城時の形状を伝えている。城郭規模は周長 11.9 km、城高 12 m、基厚 15~18 m、上幅 12~14 m、城壁の内外面および上面は磚で被われていた。

城門は四面に各一門、城門上には城楼(正楼)、その外側には甕城、甕城の上には箭楼、甕城の外側の護城、護城の上には譙楼(欠楼・閣楼)があり、三重構造で、城門外には城関があった。城壁の上に登る斜道には馬道がある。今日では一番外の護城と譙楼、城関は存在しない。また馬面(敵台)は 98 座、女牆は 5,984 か所、2 m 間隔で垛口、護城河(城濠)巾 10 m がある。

清代には城内城壁が築かれて駐防城(満城)といわれ、満州族を中核とする清朝の八旗兵が駐屯。城内を満城と漢城に区分した例は、北京城・荊州江陵城などが代表であるが、17 の府州県にも満州八旗、モンゴル

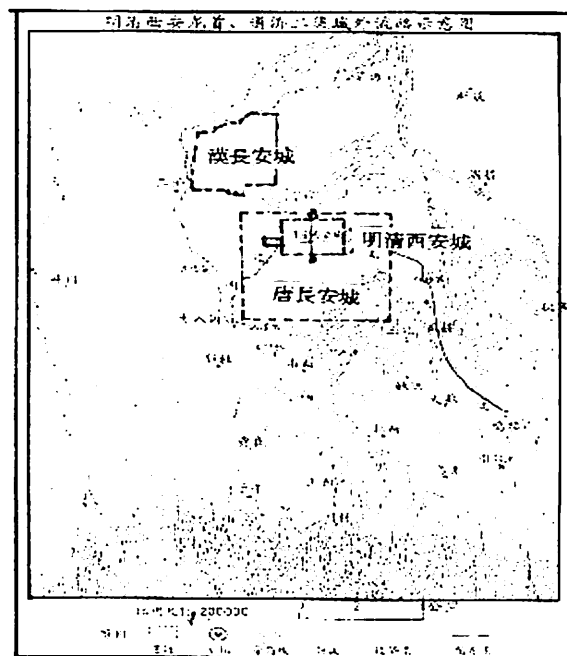


図-4 西安の漢・唐・明清期城郭位置 文献4)

八旗などが駐屯。

西安における漢長安城・唐長安城・明清西安城の位置は、図-4 のように移動した。

江陵城: 江陵は北からの漢水と南からの湘水とが長江に合流する要衝の地。後漢末の劉備・孫権連合軍が曹操を破った「赤壁の戦い」が有名。

江陵に最初に築城したのは、劉備が蜀を立てた後に関羽が築城。

現存の江陵城郭は、明清期の荊州府城で、明末 1645 年農民反乱の指導者の一人張献忠により攻陥破壊されたが、翌年清朝により再建され、以後清代に十数度修復された。東西 3.75 km、南北 1.1 km、周長 10.5 km、城高 8.83 m、基厚 10 m、城の基礎は全て石積み、その上が磚城。城門は六か所、門の上には門楼があり、甕城を持つ二重城郭。

清の康熙 23 年(1684)城内を東西に二分する上墻が築かれ、東側が八旗駐防兵の満城、西側が漢城とされたが、辛亥革命時に撤去された。

平遥城: 平遥県城は太原市の南 90 km にあり、現存城郭は明の洪武三年(1370)旧城を拡張して築かれた。周長は 6.86 km、城高 8~10 m、上幅 3~5 m の磚城。72 の馬面が張り出していて、敵楼が残されている。城門は東西面に各二門、南北面に各一門計六門で、甕城構造。平遥城は、城郭部のみでなく、城内の街並み・官署・寺観・商店街の保存が良く、世界遺産に登録。

明清期には、山西商人の活動拠点の一つで、清代には票号と呼ばれる為替業務を行う金融業が栄えた。

表－1 中国主要都市の名称の変遷

太字：首都 ()：王朝名

時代 都市	殷	西周	東周		秦	前漢	後漢	三国 魏呉蜀	西晋 五胡十六国	東晋	南北朝	隋	唐	五代十国 遼	北宋 西夏	南宋 金	元	明	清
			春秋	戦国															
北京		薊							幽州			涿郡 (北魏)	幽州 范陽 雲州	幽州 折遷(遼)		中都(金)	大都	順天府	北京
大同									平城							西京(金)	大同		
太原		大夏				晉陽 太原		太原					并州	晉陽 (北漢)	太原 陽曲		太原 陽曲		
開封		大梁				梁儀							開封 汴州	大梁 汴州	汴京 (北宋)	臨安府	汴梁	開封	
洛陽		洛邑			三川	洛陽		(魏)			(北魏)				河南		河南		
西安		鎮京				長安					(西魏) (北周)	大興	長安		京兆		奉元	西安	
陽州		広陵 (楚)										江都	揚州				揚州		
南京		金陵 (楚)						建業 (呉)	建康		(宋)	江寧	金陵	金陵	建康		集慶	応天府 (南京)	江寧
蘇州					呉							呉州	呉 蘇州	蘇州	平江		呉江	蘇州	
杭州						錢塘		錢塘				杭州	錢塘			臨安 (南宋)	杭州		
成都					成都	蜀郡	益州	(蜀)	益州			梁州 蜀郡		(後蜀)					
重慶					江州 巴郡						黔江 巴郡	巴郡	巴郡 益州			重慶			
広州					番禺 南海		南海	交州	広州			南海	広州			番禺			

1 0. 中国の主要都市名の変遷

以上に述べてきたことを整理し、中国の主要都市の時代変遷に伴う名称の変化を 表－1 に示す。

1 1. あとがき

中国における城（＝城郭都市）の歴史の変遷は、その時代の政治的社会的背景を反映した宮城・府城・郡城・県城などが構築された。基本的には、宮廷や庶民の居住区を取り囲んだ城壁内が城（＝城郭都市）であり、城壁には様々な防御機能が設けられていた。

城郭都市と言えば壮大な都城クラスに関心が向くが圧倒的に数が多いのは県城クラスのものであり、これらに関する資料研究・分析などは不十分で、今後に期待しなければならない。

参考文献

1) 愛宕元：「中国の城郭都市」、中公新書 1014、中央公論社、1991. 3. 25
2) 岡崎勝世・鈴木薫・並木頼寿監修：「ユニバーサル新世界史資料」、(株) 帝国書院、2002. 3. 25
3) 成美堂出版編集部：「図解世界史」、成美堂出版、2007. 3. 10

4) 史紅帥：明清民国西安城市水利建設及其景観研究（1368～1949）、近世江戸の都市水利－江戸と長安－、中国水利史研究会、2009. 11
5) コリンヌ・ドウペーヌ・フランクフォール著・南條郁子訳：「古代中国文明」、(株) 創元社、1999. 9. 20
6) 伊原弘：「中国中世都市紀行」、中公新書 897、中央公論社、1988
7) 陳高華著・佐竹康彦訳：「元の大都」、中公新書 731、中央公論社、1984
8) 杉本憲司：「中国古代を掘る」、中公新書 813、中央公論社、1986
9) 江楽興主編：「100 座古鎮古城」、北京化学工業出版社、2009. 4
10) 周安貞任編集：「中国古鎮遊」、陝西師範大学出版社、2010. 1
11) 墨刻編集部・張軍責任編集：「シルクロード經典之旅」、人民郵電出版社出版発行、2010. 1
12) 田中邦熙：朝鮮半島の城、土木学会第 28 回土木史研究発表会、於九州大学、2008. 7. 5～6

用語解説

1. 城郭用語

磚：黄土を練り固めて焼成した煉瓦

夯打法：黄土を一定の厚さごとに突き固めて層を造る版築技法

護城坡：城壁を補強する 坡

城壕（または馬面）：防城効果を高めるために城壁を外側に突出させた部分

甕城（月城）：城門の外側に設けたもう一重の城壁

墩台：城郭四隅に設けた高い長方形の監視哨

羅城（外郭城）：城の周囲を土や石などで築いて巡らせた囲い

夾城：城壁上の両側に障壁を設けた皇帝潜幸のための専用道路

子城（牙城）：城内で主將のいる所、本丸

羊馬城：城郭外 15.5 m ほどの濠の内側に築く厚さ 1.8 m、高さ 1.5 m 程の土牆で、臨戦時の付設城壁

瓦子：勾欄（常設の演芸劇場）・酒楼等の娯楽施設が集中した場所

関城：甕城をより大規模にして城門全体を開き、防禦機能を強化した場所

欄馬牆：羊馬城の一種

女牆：城壁上に設けた凹凸状の壁

垛口：射撃用の小窓

敵楼：馬面上の四角い構造物

团楼：馬面の一種だが、馬面のように下部ほど厚さが増えていなくて、城壁面をそのままの厚さで円形にカーブさせたもの

城制図：城郭の正面である城門を中心とした形状

2. 歴史用語

商鞅の変法：秦の孝公（BC361～380）が衛国の公子商鞅を重用して行った国政改革。

封建制：周代に行われた、天子がその領土を諸侯に与え、さらに諸侯はそれを臣下に分与して、各自にその領土内の政治を行わせる制度。

郡県制：戦国時代から秦代に行われた、中央集権的地方行政制度。全国を皇帝の直轄地として郡・県に分け、皇帝の任命する官吏を地方に派遣して、地方統治する。

内徙策（徙民策）：後漢以後の政府は、匈奴・羯・姜・氏族などの遊牧系諸族を分断して中国内地の陝西・山西・甘肅等の荒地に強制移住させた。

唐宋の変革：唐滅亡後半世紀に及ぶ分裂時代を経、再び統一した宋代（960～1279）への時代変遷は、単に王朝の交替にとどまらず、中国社会全体の流動化・多様化

と言った歴史的社會變動が生じた時代であった。

靖康の変：北宋の靖康年間（1126～1127）金軍が首都開封を占領し、徽宗・欽宗以下の皇族・貴族を捕え北方へ連れ去った事件。宋朝は一時中断したが、間もなく欽宗の弟の高宗が南朝を再興した。

坊市制：唐代までの城郭都市では、治安と管理が最重要であり、城壁で囲まれた城内はさらに街路で区切った坊というブロックに分割され、坊の周囲も塀がめぐらされ、坊内への出入りは二三の坊門に限られていた。

3. 重要な戦い

安史の乱：755 年、唐の中期、玄宗皇帝の晩年に節度使の安祿山と史思明らが起こした反乱。763 年肅宗の代に鎮圧したが、唐の中央集権体制は弱体化した。

陳勝・呉広の反乱：秦に対して、陳勝・呉広は反乱の兵を最初に起こした。

楚漢の争い：楚国項羽の部下だった劉邦は秦代末、陳勝・呉広に次いで挙兵し秦を滅ぼしたが、覇権は項羽のものとなり、漢王に封じられた。BC202 年項羽を垓下の戦いで破り天下統一、帝位につき、漢の初代皇帝となり、高祖となる。

黄巾の乱：後漢末期張角が首領となって起こした農民の反乱。184 年黄老の教えに基づく太平道を奉じ、全員が士の徳を示す黄色い布をつけて決起したが、張角の死後平定された。この黄巾の乱平定に活躍し勢力を伸ばし中国北部を統一したのが、魏の始祖曹操である。

官渡の戦い：袁紹は後漢末靈帝の没後、宮廷の宦官勢力を一掃し、華北で勢力を持っていたが、官渡の戦いで曹操に敗れ、曹操の子曹丕が魏国を建国。

赤壁の戦い：後漢末 208 年に蜀の劉備・呉の孫権の連合軍が、南下してきた魏の曹操の水軍 80 万を湖北省赤壁付近の長江で迎え撃ち、少数の兵で大敗させた。赤壁の戦いの後、魏・呉・蜀の三国時代となる。